

IV 現 職 教 育

研究主題 一人一人が生きる学びの過程を創造する

サブテーマ

～子供が心揺り動かす国語科授業…高松が魅せる国語のチカラ～

1 はじめに

国語科教育の本質は、言語のもつ思考・認識・表現・伝達などの機能を総合的に使って、人間や社会、自然についての正しく豊かな見方、考え方、感じ方を知らしめ、子供の人格や世界観の形成に直接寄与するものである。

言い換えれば、言語によって子供を未来に生きる人間としてそれにふさわしい資質や能力を育てていくのである。

本校では、研究主題を「一人一人が生きる学びの過程を創造する」と設定し、主として文学教材を題材にして「人の生き方」を中核に据え、子供が考え、友達と交流し互いの考えの相違点や類似点などを追究しつつ合意形成していく授業における「対話」を中心とした授業づくりを進めてきた。

同時に、子供が思考を深めていく手がかり・布石として、また単元に流れるテーマ性を一貫して学ばせるために吟味して選定したもう一つの教材を副えて大単元を組み立ててきた。

このようにして積み上げてきた研究を通し文学教材を中核に据えた真摯な授業づくりのなかで、本校では子供たちに文学体験をさせる・・・言語を媒介として一つの世界を体験させる・・・ことが具現されていると感じる。子供が、物語の展開に心揺り動かす、言葉によって構築された世界を想像する、浸る。まさに教室に、そのような姿が見られるのである。

この子供が、心を揺り動かせるということ。すなわち、授業中、子供が教材と自分自身と、そして友達との対話を深め、共感や共鳴、同情、讃嘆や憧れあるいは反発など、心の揺れを伴った言語世界に浸らせて新しいものの見方、感じ方を獲得していくその過程こそが、「豊かな心」を育む過程であると言える。わたくしたちは、教師である以上、授業で子供を変える。自己変革の契機を創り出す。そのことを念頭に教師としてのシゴトを為さねばならない。

そのために必要な教師のチカラの3大要素は、

①感性

②単元構想力

③洞察力

であると考えます。

子供の人間をとらえ、夢中にさせずにはおかない単元構成を組み、心躍る切り口に如何に出会わせ、話し合わずにはいられない個々の考えを育て、集団を創る。そして、授業においては、まさに臨場。その場で、子供の発言の本然をとらえつつ本当に話し合わせたいところへとどう誘っていくのか瞬間、一瞬の言葉を洞察し、広げ、つなげ、深めていく・・・。子供が、夢中で心湧き立たせて考える、そのような国語の授業づくりを究めていきたい。そう思うのである。

子供を人として育て上げていく、その発達と学びの連続性を踏まえて、楽しくもあり厳しくもあり、熱くもあり冷静でもある充実した国語科の学習体験を積み上げていく、それが高松の魅せる国語のチカラと胸をはって言える、そんな授業づくりをめざし日々新たに研究を見直し実践し続ける。

そのような研究を教職員一同進めていきたい。

2 研究を始めるその前に

(1) 教師としての感性を磨く・・・ベースのシゴト

①まず子供を見つめるシゴトから始めよ

子供は未完のまま輝いて生きている。教師は、子どもの未完の姿を愛おしみ慈しみながら、やわらかくしなやかに子供のまことに触れ、その育ちを助けていくのである。

子供のなかに人間を見つめ、その人間を尊重し愛し伸長させていく慈しみの心をもつこと。教室の中で、その子供は幸せか、子供の姿、背景を慎重に見つめ、一人一人が自らを開いて柔らかに息づいていくよう教師としてのシゴトを為していくのである。

そのシゴトの具体は授業の中で、

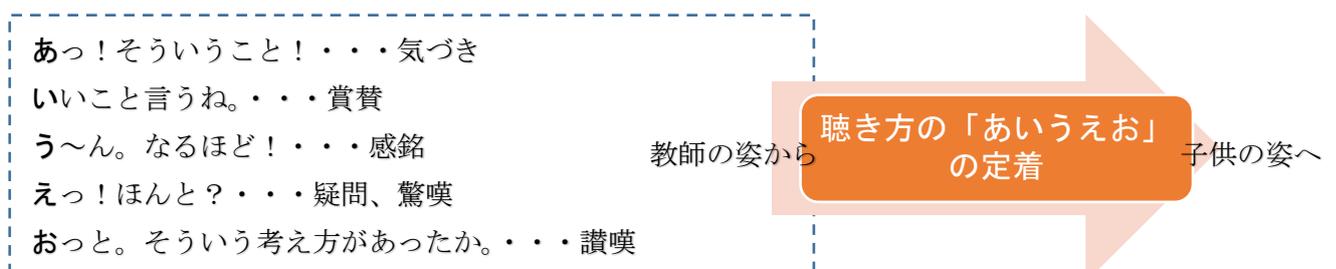
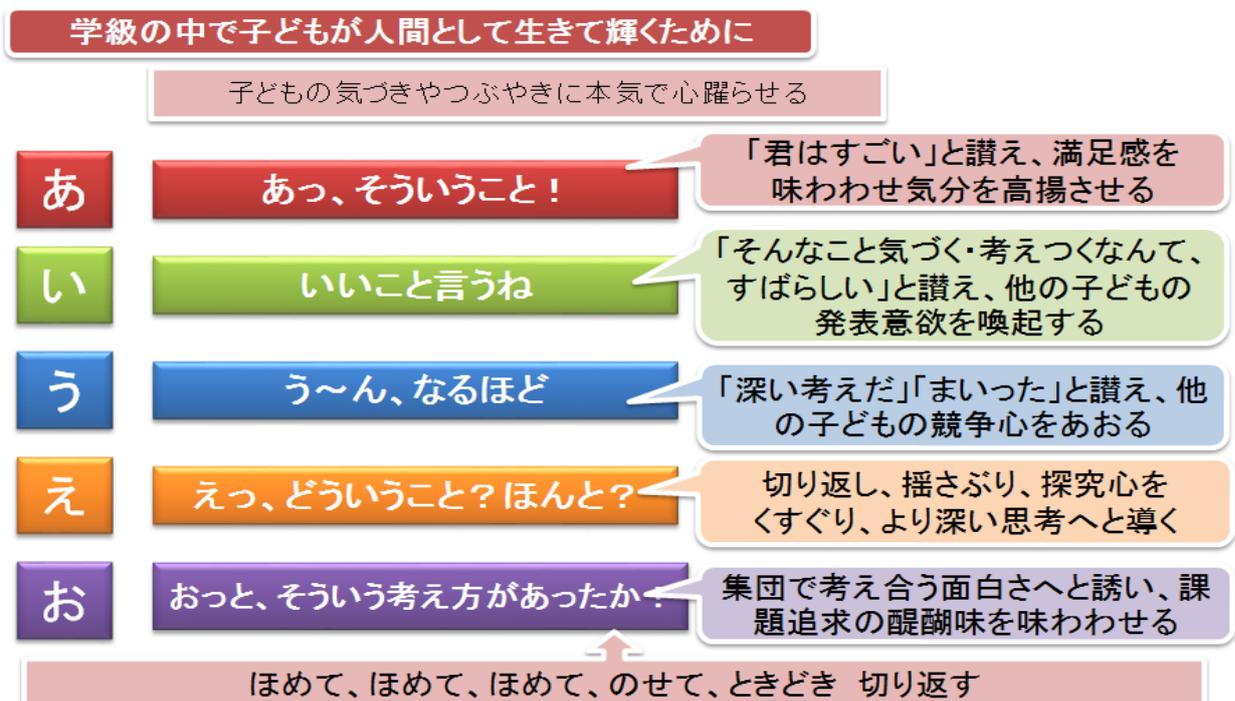
ア) 子供の発することばを、対人間として心動かしながら聴く。

イ) 子供の感じ方のおもしろさを味わう。

ウ) 言葉にならない子供の本然の思いを、その表情やしぐさから探っていこうとする。

ことから始める。

子供の話に心を動かしながら、感嘆符つきで聴く。その聴き方の「あいうえお」を教師の基本とする。



これは、とりもなおさず人を人として大切にし、尊重することの基本であり、子供相互が人間として認め合う学級集団を創っていく道程の出発点である。この心動かす聴き方を、授業での話の聴き方のベースとして教師が先ず率先して行い、自然と子供にも定着させていくのである。

②教室で子供に自らを開かせる

ア) まず、褒めよ。

子供が授業で本然の思いを出すということは、自分という人間を見せる、さらけ出すということでもある。母体である学級集団が、あたたかくどんな発言も受け入れられるという安心感があってこそ実現できるものであろう。

そのような学級集団を創るために、まず教師は個を認めて褒める。その個のよさ、発想や表現のおもしろさ、その子供の来し方（直接体験・間接体験、経験）を学級の場に引き出し、驚いたり、感嘆したり、納得したりする。その子供の表情、姿勢、行動、やさしさ等々、教師は感性豊かに受け止め、褒めて褒めて、褒めることにより適切に評価し、一人一人の子供に自己肯定感・自己有用感を涵養していくのである。

イ) 音読の質を上げ、声を合わせる心地よさを味わわせよ。

音読・暗唱など声を合わせることから生まれる一体感を存分に味わわせるために、一斉による音読、暗唱を重視する。

このとき、心地よさを感じるためには、腹から声を出し、友達の声との響きを感じながら読むということを意識させることが大切である。すなわち、その音読の質が重要となる。

美しい姿勢で
張りのある声で
場面の映像が立ち上がるように
登場人物の心情が迫りくるように

- ・音読で自分を存分に表出
- ・自分を教室で開く体験

質の高い音読は、子供の感性を豊かに育み、表現の美しさや楽しさ味わわせることができる。

学級集団のなかで、子供に質の高い音読を追求させ、自分のよさや正しさ、自分らしさを存分に表出させる。教室で自分を開かせる。

そうして、聞く者の心打つ音読ができる学習集団を育てあげていくのである。

～子供が心揺り動かす国語科授業・・・高松が魅せる国語のチカラ～

3 研究の視点

(1) 魅力ある単元構想を練る

子供の心揺り動かす授業を創るためには、教材を前に、まず教師自身が心躍るような学習単元を構想しなければならない。

そのためのロードマップとして、

①まず、その単元で子供に身に付けさせるべき国語のチカラを見定める。〈行先〉

学習指導要領に示される学年に応じた領域ごとの目標を鑑み、国語科としてどのような力を身に付けさせるのかを明確につかむ。

各学年における各領域の目標

	第1学年・2学年	第3学年・4学年	第5学年・6学年
A 話す・聞く	(1) 相手に応じ、身近なことなどについて、事柄の 順序 を考えながら話す能力、 大事なことを落とさない ように聞く能力、 話題に沿って話し合う能力 を身に付けさせるとともに、 進んで 話したり聞いたりしようとする態度を育てる。	(1) 相手や 目的 に応じ、調べたことなどについて、 筋道を立てて 話す能力、 話の中心 に気を付けて聞く能力、 進行に沿って話し合う能力 を身に付けさせるとともに 工夫をしながら 話したり聞いたりしようとする態度を育てる。	(1) 目的 や 意図 に応じ、考えことや伝えたいことなどについて、 的確 に話す能力、相手の 意図 をつかみながら聞く能力、 計画的に話し合う能力 を身に付けさせるとともに、 適切 に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。
B 書く	(2) 経験したこと や 想像したこと などについて、 順序を整理し、簡単な構成 を考えて文や文章を書く能力を身につけさせるとともに、 進んで 書こうとする態度を育てる。	(2) 相手や 目的 に応じ、調べたことなどが伝わるように、 段落相互の関係 などに注意して文章を書く能力を身につけさせるとともに、 工夫をしながら 書こうとする態度を養う。	(2) 目的 や 意図 に応じ、考えたことなどを 文章全体の構成の効果 を考えて書く能力を身につけさせるとともに、 適切 に書こうとする態度を育てる。
C 読む	(3) 書かれている事柄の 順序 や 場面の様子 などに 気づいたり、想像を広げたり しながら読む能力を身につけさせるとともに、 楽しんで 読書しようとする態度を育てる。	(3) 目的 に応じ、内容の 中心 をとらえたり 段落相互の関係 を考えたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、 幅広く 読書しようとする態度を育てる。	(3) 目的 に応じ、内容や 要旨 をとらえながら読む能力を身につけさせるとともに、 読書を通して考えを広げたり深めたり しようとする態度を育てる。
	順序・大体・進んで・想像	目的・筋道・中心・段落・叙述	意図・適切・効果・要旨・深化

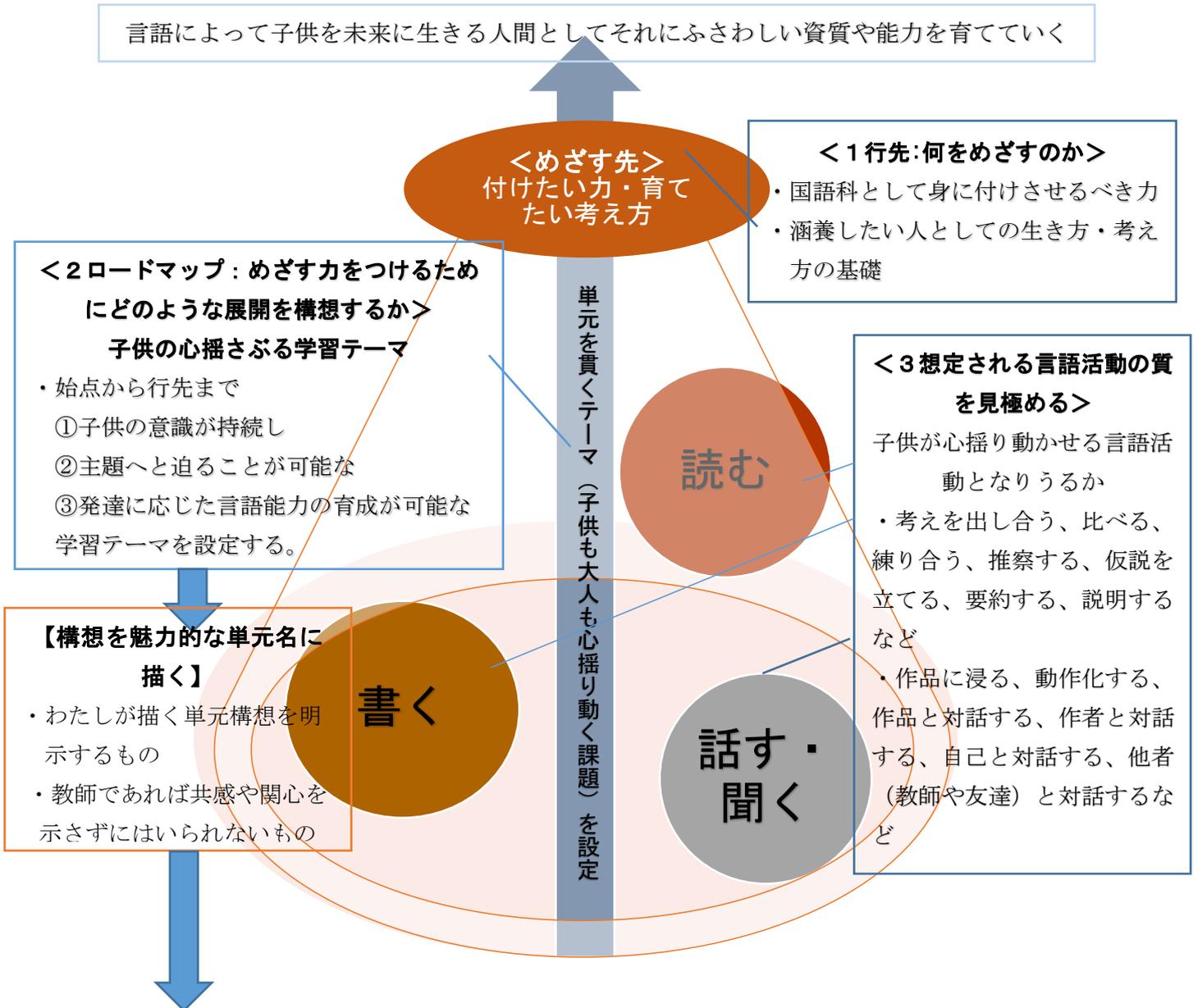
②見定めた力を育成するためにどのような学習を展開するのか単元構想を練る。〈プランニング〉

このとき中核に据えるのは、「わたしも子供もともに夢中になれる」ことである。

これから展開する学習の過程を魅力的なものにし、子供が考えずにはいられないようなものとなるようにとことん模索する。

そのために、教師は単元を貫いて子供が考え、追究し続けるテーマを設定する。そのテーマを単元名として打ち出し、子供を夢中にさせながら身に付けさせたい力をつけるための学習体験を積み重ねるような学習過程を創っていくのである。

<イメージ図>



(2) 魅せる学習指導案で子供とわたしを描く

①単元名は、わたしが描く単元構想を明示し、教師であれば共感や関心を抱かずにはいられない魅力的なものにする。

《例1》「ごんぎつね」

↓
 単元名「ごん・・・もし、おまいがぼくのしんゆうだったなら・・・この気持ちつたえたい。」

↓
 「ごん、おまいのことは自分が一番わかっているよ。」という視点で、書く活動を中心にして、
 ・作品の世界に浸らせてみる。
 ・子供をごんの親友になりきらせ、親友の視点からの「アナザーストーリー」を綴らせていく。分かってもらいたいのが分かっては困るというごんの葛藤にシンクロさせ、切なさを際立たせていくことができるのではないか。
 ⇒「こんなことがあってはならない。」というアンチテーゼに胸を焦がせることが可能ではないか。

《例2》「わらぐつのなかの神様」

↓

単元名	どうして、こんなに胸が <input type="text"/> するの？ ～「わらぐつのなかの神様」という作品と対話するわたし～
-----	----------------------------------------------------------------------

高学年として、作品から滲み出る作者の人間観に迫らせない。作品と対峙し、そこから受ける感動の在りかを自分の心に問いかけさせ、探らせてみる。

- ・「ここが好き！」を抽出させ、作品の底流に流れるあたたかさ、美しさに気付かせる。
- ・「ここが好き！」を出し合い、だれもが感じるあたたかさや美しさの根源はどこなのか、もう一度作品と対話をさせる。
- ・心を打つ根源は作品のどこにあるのか、友だちが考えたことと交流させる。
⇒人間として普遍的な大切なものとは何かについて考えさせ気づかせていくことが可能。

②「わたし」が子供とともに描く単元構想を明記する。

わたしは、この題材をとおして子供とともに何を考えたいのか。どのような国語のチカラを付けたいのか。そのためにどのような言語活動を設定するのか。どこで子供の心を揺り動かしたいのか。子供の心になにを残したいのか。

わたしの単元に対する思い、考え、そして国語のチカラを育むためのわたしの仕組み仕掛けについて論述したい。

③本時は子供が拓く。

本時は、貫きとおしたテーマに沿って設定した課題（的）に向う子供の姿を徹底して追求したい。

本時の展開では、課題に向かって話し合うなかで、共感したり、反論したり、対立したり、広げたり、深めたり、収斂させたりしつつ夢中に安って話し合う子供をイメージして学習活動を設定する。様式、形式は問わない。授業者が、期待する子供の姿を描けばよいのである。

(3) 授業で洞察力を磨く

①子供の本気を引き出す

自ら発した発問に子供が応えてくる。教師は、それを誠実に受け止めることから始めなければならない。意に合わなければ反応もせず、「ほかに？」などと言っているようでは、当然ながら子供が拓く授業にはなり得ない。

まずは、顔と顔を見交わして、子供の本然を探る。教師が探れば、学級の子供も探り出す。「こういうことを言っているのではないか。」「ちょっと違うかもしれないけれど。」「言い換えてみると、多分こうではないか。」などと言いながら相手の意図をつかもうとする動きが見えてくる。

教師は、丁寧に聴き取り根気強く子供同士が広げつなぎだす瞬間を待つ。待つてすかさず認める。褒める。「なるほど。そういうことか。」「さすがだね。」「深いね。」と、褒めて褒めて子供がほこほこするなかで、本時のねらいの的を射る発問・切り返しを行っていく。

それに応える子供に「言わずにはいられない」わくわくするような言語による思考・追究体験をさせていく。

そのためには、教師はうかうかと子供の発言を聴いてはいられない。聴きながら、子供の発言なかから真の的を探り当てていく、本当の話し合い・議論へと導いていくシゴト・・・洞察力が必要となってくる。

このように授業中、教師は一瞬たりとも気を抜くことはできない。教室の中で最も子供の発言を

「あいうえお」で聴く「聴き方率先者・上級者」でなくてはならないのである。

学級の中で子どもが人間として生きて輝くために

子どもを授業に没頭させる あいうえお

あ

相手の顔・表情を見ながら

聞く方も発表する方も、友だちの顔を一人一人見ながら、伝わるまで説明させる。納得するまで聞かせる。

い

いす・机の並べ方を工夫して

友だちの表情、反応を確認しながら発表できる並べ方に。

う

うなずいたり、首を傾げたり、感嘆したり

友だちの意見を傾聴する態度を身につけさせ、同意や共感、疑問を持たせる。時にはちょっと待ったコールも。

え

「描く」自分の考えの道筋を図などを交えて表現する

話し合いの最中は、話し合いに没頭させるが、考えを深めたり、まとめさせたりするときに描く(書く)ことも重要。

お

思わず出たつぶやきを拾い、広げ、深める

集団で考え合うなかで、思わず出たつぶやきの中にひらめきがあることも……。一つとして聞き逃さない。

ほめて、ほめて、根気よく、徹底して身につけさせる…教師のしごと

②子供の発言からジャンプする真の追求課題「的」を探る。

本時の学習課題として、よく目にするのは「〇〇の気持ちを考えよう。」などといった一般化されたものである。しかし、1時間の授業の中で、これは導入における課題としてのみ存することが多い。

私たちが追求する学習課題は、そこから生まれ、子供の真の追求課題となって浮き彫りになってくるものである。教師は、これが子供の話し合い・議論の中から生まれてくることを期待し、授業する。

本校では、これを「的」と呼称する。

<的とは>

- ア) 子供の考えの中から生まれてくるものである。
- イ) 汎用性のある課題ではない子供の真の追求課題となりうるものである。
- ウ) 的が定まれば、話し合いの核が決まる。
- エ) 的が定まれば、子供だけの話し合いに任せることができる。
- オ) 的に当てながら子供が話し合いを進めることで、新たな疑問、課題が生まれてくる。
- カ) そこから生まれた新たな課題を、次の追求課題にしていくことができる。

本気になって考え、反論したり共感したりし合い、心動かしながら学び合う姿が見えてくる。

教師は、授業の中でこの的となりうる発言(つぶやきであることもある)を聞き逃すことなく、胸に拾い上げておく。そうして、時を読み、満を持して子供の話し合いの渦に切り込んでいくのである。

この弓をきりりといっぱい引き絞った状態から、矢を放つ時こそが教師の出場である。この瞬間を過たず見極めていくことは1時間の授業をどう創っていくかという臨場の洞察力である。

③出し合い・話し合いから議論へと育てていく・・・語感の育成

話し合いを子供が中心となって動かしていく

【高学年】推察する・仮定する・検証する・帰結する・省察する「・・・ということじゃないの?」「たとえば・・・とすると」「...という結論になる」「つまり・・・ということでは?」「ふりかえって考えてみれば・・・」

話し合いを子供が動かしていく手助けをする

【中学年】比べる・共感する・反論する・見つける・まとめる「ちょっと似てるけど」「すこし違うけど」「つまり、こういうこと?」「さっきの意見のことだけど・・・」「やっぱり、思うんだけど・・・」

話し合いを子供と教師と一緒に動かしていく

【低学年】表出する・楽しむ・広げる・つなげる

体験を引き出す⇒同じ体験、似た体験を想起させ自分の言葉で語らせる。「そうそう、ぼくもね。」「あっ、それならね!」「おばあちゃんがね・・・!」

発達に応じ互いの考えを出し合い、比べ、吟味し、磨き合っていくために、授業ではロジカルシンキングの用語として接続詞を駆使し、子供の語感を養い、自然と身に付けさせていく。

<例>

ア) 前の文を原因・理由とする結果を表す(順接・因果)

「だから」「それで」「そこで」「そうすると」

イ) 前の文と対立する内容・反対の概念を表す(逆説)

「でも」けれど」「だけど」「ところが」「とはいえ」「それでも」

ウ) 前の文と同列のことを挙げたり、付け加えたりする(並列・付加)

「そして」「それから」「また」「しかも」「その上」「さらに」「かつ」

エ) 前の文を言い換えたり、理由を説明したりする(補足・理由説明)

「つまり」「すなわち」「なぜなら」「たとえば」「ただし」「ちなみに」「要するに」「言い換えれば」

オ) 前の文と比べたり、どちらかを選んだりする(対比・選択)

「または」「あるいは」「それとも」「そのかわり」「むしろ」「いっぽう」「もしくは」

カ) 前の文と話題を変える(転換)

「ところで」「では」「それでは」「さて」

(4) 学習指導案

わたしが子供とともに創る授業が、何を育てることを願うものか。そしてその実現のために構想した単元は、いかに面白く、楽しく、子供がわくわくしながら自ら学んでいけるものとなるのか。また、的となりうる追求課題はこうして生まれるということを仮説として提案していく。

学習指導案には、

①単元名・・・「わたし」が構想することを表現する

②単元目標・・・指導要領の内容を踏まえ、発達に応じた育てるべき国語の力を明確に示す。

- ③わたしが描く単元構想・・・指導計画である。この計画により、子供にどのような国語のチカラを育むのか。願い、活動内容とその意図を明快に記述する。
- ④本時で描く子供の姿・・・これまでの子供の学習の姿・発言・考え・ノートから、子供の中から生まれるであろう「的」について記述し、期待する子供の姿を描く。
- ⑤本時の展開・・・形式は自由。吹き出しを入れたり、前時の学習から予想される子供の発言、対立するであろう意見を記載したりするなど、見る者の心躍らせ、わくわくする本事案を提示する。
- ⑥その他・・・子供たちとともにどう学んでいくのか、そのロードマップを単元構想図として絵図で表現するのもよい。また、これまでの話し合いの的や子供に願う変容を座席図に記入するのもよいであろう。

<例>

第○学年 国語科学習指導案

年 組 指導者

- 1 日時
- 2 学年・組
- 3 単元名

- 4 単元目標

A話す・聞く	B書く	C読む	伝統的言語文化・国語の特質

- 5 わたしが描く単元構想

単元指導計画である。単元名に込めた願い・意図・学習計画を記述。

この計画により、子供にどのような国語のチカラを育むのか。わたしがわたしの学級の子供と共に創りたい単元計画を表現。願い、活動内容とその意図を明快に記述、図などに表現する。

子供たちとともにどう学んでいくのか、そのロードマップを単元構想図として絵図（別紙）で表現するのもよい。

7 本時の学習

① 目標

② 展開・・・形式は自由。吹き出しを入れたり、前時の学習から予想される子供の発言、対立するであろう意見を記載したりするなど、見る者の心躍らせ、わくわくする本事業を提示する。

学習活動	予想される児童の学習活動	留意点・評価
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 設定するめあて 「へえ。こいつはつまらないな。」というごんの気持ちを考えよう </div>	
1		
2	<div style="text-align: center;"> <p>新たに生まれることを期待する</p> </div>	
3	<div style="border: 1px solid black; border-radius: 50%; padding: 10px; display: inline-block;"> ごんの気持ちは、おわびとかいかんたんなものじゃないと思う。 </div>	
4	形象に表れるごんの気持ちの微妙な変化をとらえていく。 ・赤いさつまいも...今日はなんだかしおれて... ・おれと同じひとりぼっちの ・くりばかりでなく松たけも・・・ ・兵十のかげぼうしをふみふみ・・・ ・うらぐちからこっそり・・・	

4 たかまつマストの時間

子供の未来につながる力を涵養するために

(1) **must** : する必要がある・すべきこと

mast : 帆…小学校教育6年間で豊かな知・徳・体の力を身に付け、自分の帆を上げて大海・未来へ漕ぎ出す

という願いを込めて、月、火、木、金曜日の13:30から13:45の15分間を「たかまつマスト」の時間に設定する。この15分間を活用し、次のような取組を全学級で行う。

- ①基礎・基本の力の錬成・・・算数、国語の基礎・基本問題に取り組む。
- ②モジュール英語・・・各学年の年間計画に応じ、英語による活動を楽しみ、英語への親しみを育成する時間とする。
- ③暗唱
- ④紀州っ子学びノート